

中国歴代王朝における天文五行占書の編纂と禁書政策

佐々木 聡（金沢学院大学文学部講師）

漢代以降、祥瑞災異思想や天文思想を背景として、天文気象の変異や地上で起こる怪異・災害から国家の未来を占断する知識である「天文五行占」が集積されていった。天文五行占は、やがて六朝以降、国家により集成され、体系的な占書として編纂されるようになる。そこで筆者は特に勅撰・官撰およびそれに類する天文五行占の類書を「勅撰系天文五行占書」（略して「勅撰系占書」）と呼んでいる。

従来の天文学史等の研究では、勅撰系占書は一部が利用されるばかりであり、通史的視野から歴代の勅撰系占書を取り上げた研究や伝本調査に基づく研究はほとんど無かった。しかし近年では、個別の勅撰系占書について、筆者や田中良明氏、高橋（前原）あやの氏らが成果を発表している。こうした一連の研究の中で、筆者が常に注意を払ってきたのが、勅撰系占書の流布や海外伝播、禁書政策との関係である。

こうした問題関心から、本報告の前半では、歴代正史の書目と筆者がこれまで行ってきた伝本調査に基づき、歴代王朝で編纂された勅撰系占書の素描を試みる。これにより歴代王朝による勅撰系占書の編纂は、晋代頃から始まり、清代までほとんど途切れることなく続けられたことを明らかにする。次に、後半では、歴代王朝の禁書政策の検討から、こうした勅撰系占書の流布がどのように制限されたのかを考えてゆく。これにより、漢末に始まった勅撰系占書の禁圧が元代以降ゆるみはじめ、徐々に民間にも勅撰系占書が流布するようになったこと、また明清では、勅撰系占書に対する禁書が有名無実化し、一部の勅撰系占書が出版され、刊本が流布してゆくことを明らかにする。そして、こうした状況は、天文五行占の地位低下と表裏一体の現象であったが、かえって広く社会に流布することで、天文五行占をめぐる怪異観が社会通念として浸透していったことを明らかにする。